

# 筑波大学日本文学会会報

第24号

2000年2月

長保二年という年	一
(石埜敬子)	
日本文学会だより	三
研究室だより	五
教官新刊紹介	九
卒業生だより	十二
日本文学会教官学生名簿	十六

## 長保二年という年

石 埜 敬 子

節会停、是久年依申請卿定也、右府・内府・源大納言・右大将・民部卿・藤中納言・平中納言・藤宰相・左衛門督・右衛門督・左兵衛督・左大弁・宰相中将並殿上人等来、無拜礼、事了兩府引外物有、各馬一疋、但家司等早朝為拜礼、從此参院……

西暦二千年、新しいミレニアムの年が明けた。目の前の仕事に追われる日常生活の中では千年単位でものを考えることなどそれほど多くないが、今から千年前といえば日本では長保二年、平安時代の真ただ中である。冒頭文は、その年の一月一日に藤原道長が記した『御堂関白記』の一節。自筆本が残っていて今も彼の筆跡を目にすることができる。こうなると千年はそれほど遠い昔ではない。この年は、前年崩じた太皇太后宮昌子の諒闇のため宮中での節会は停止と決まっていた。しかし右大臣、内大臣をはじめ、主だった上達部や殿上人がこぞって左大臣道長邸を訪れている様が見てとれる。道長は両大臣に引き出物としてそれぞれ馬一匹を贈っているが、当時の馬は今で言えば車一台にも相当したから、これはかなり高価な贈り物であった。

じつはこの年は、道長にとってターニングポイントとなるべき重要な年だったのである。娘の彰子は前年に数え年十二歳で裳着をす

ませ、一条天皇のもとに入内、十一月七日に女御の宣旨が下っていた。しかし天皇のもとには藤原道隆の娘定子がすでに十年前に入内して中宮の位置にあり、彰子に女御宣下のあったまさにその日、奇しくも定子は天皇の第一皇子敦康親王を出産していたのである。後宮に中宮が存在する以上、時の権力者道長をもってしても彰子は女御の地位にとどまらざるを得ない。政権を確保するために道長としては何としても娘を后にする必要があった。彼は強引な策謀をめぐらして、中宮であった定子を皇后に格上げし、女御彰子を中宮に据えることに成功する。長保二年二月のことであった。そもそも中宮という呼称は、律令制では皇后・皇太后・太皇太后の総称であったが、醍醐天皇の時代以降は主として皇后の別称として用いられていた。それを中宮と皇后を別のものとし、一天皇に二后を並立させたのである。このような奇策を考え出したのは道長政権のブレーン藤原行成であつたらしい。『御堂関白記』や行成の残した『権記』には、そのあたりの経緯が微妙かつ慎重に記されていて興味深い。歴史は皮肉なもので、その数カ月後の十二月に定子は他界するのであるから、強引な手を用いなくとも時の流れは道長に味方していたのであろうが、先を知る由もないゆえに、懸命に画策する人間の営みが後世の我々の前に明かされることになったのである。当時、紫式部や和泉式部は二十代、まだ彰子のもとには出仕していなかった。紫式部の夫藤原宣孝が疫病で他界するのが翌年の長保三年、和泉式部と冷泉天皇皇子為尊親王との恋愛沙汰もその頃のこと。清少納言は通説によれば三十代半ばあたりであった。道長の政権が不動のものになるのはさらに八年後の寛弘五年、彰子腹敦成親王の誕生を待たなければならぬが、撰関政治の中で地歩を固めたこの年は、世界に誇る女流文学者たちが喜びや悩みを抱えて日々を暮らしていたという意味で、私にとってなつかしくも誇らしい時間である。

さて、これから先の千年で世の中はどう変化してゆくのか、私には想像もつかない。次のミレニアムを迎えるに当たってその時代の人々が振り返った時、私たちが生きているこの西暦二千年はどのような意味を持つ年になっているのだろうか。『源氏物語』のように千年の時間に耐える作品は生まれてくるのかとなると、いささか心もとない気分になるのだが。

(平成十二年一月十日記)